

奨学金が支えてくれた挑戦と、音楽を未来へつなぐために

ドイツ・ハノーファー音楽演劇メディア大学 修士課程

私はこのたび、大堀秀夫記念育英財団奨学金の返還免除という大変ありがたいご決定をいただき、心より感謝申し上げます。この奨学金は、私にとって経済的な支援にとどまらず、自分の夢に向かって挑戦を続けるための大きな支えとなりました。

私はチェロを専攻し、東京藝術大学音楽学部および大学院で学び、現在はドイツ・ハノーファー音楽演劇大学で室内楽、特に弦楽四重奏を中心に研鑽を積んでいます。

これまでの学生生活では、演奏技術を磨くために多くの演奏会やコンクールへ挑戦してきました。その結果、第15回ビバホールチェロコンクールで第3位、全日本学生音楽コンクール全国大会で第2位という成績を収めることができました。ビバホールチェロコンクールは、日本の若手チェリストにとって最も重要な登竜門の一つとして知られており、このような結果を残せたことは大きな励みとなりました。しかし、その成果は決して一人の力で得られたものではありません。日々の学びを支えてくださった先生方や家族、そして奨学金を通して挑戦する環境を与えてくださった皆様の支えがあってこそ得られた経験であると感じています。

音楽を学ぶには、楽器の維持費や弦・楽譜などの消耗品、演奏会や講習会への参加費など、多くの費用が必要です。さらに海外で学ぶためには渡航費や生活費も加わり、経済的な負担は決して小さくありません。私自身も将来への期待と同時に不安を抱えていましたが、この奨学金のおかげで経済的な心配を少しでも減らし、自分が本当に学ぶべきことに集中することができました。

現在学んでいるドイツでは、室内楽が日常の文化として深く根付いています。演奏技術だけではなく、「四人で一つの音楽をつくる」という考え方が教育の中心にあります。また今年参加したイタリア・シエナでの講習会でも、国籍の異なる演奏家たちが朝から夜まで自然に集まり、演奏について議論し、互いに刺激を受けながら音楽をつくり上げていく姿が印象的でした。練習室の外でも作品について語り合い、その延長線上に演奏があるという環境は、日本ではまだあまり経験したことのないものでした。

私はその中で、「室内楽は演奏技術だけでは完成しない」ということを改めて実感しました。互いの考えを尊重し、時には意見をぶつけ合いながらも、一つの作品をより良いものへと高めていく。その過程で必要なのは、技術以上に、人を理解

し、自分の考えを伝える力であることを学びました。この経験は、演奏家としてだけでなく、一人の人間としても大きな財産になっています。

将来は、演奏活動を続けながら、日本において室内楽をより身近な文化として広めていきたいと考えています。演奏会だけでなく、音楽祭やセミナー、公開レッスンなどを企画し、若い演奏家が学び、交流できる場をつくることが私の目標です。海外で学んだ経験を日本へ持ち帰り、「室内楽を学ぶことが特別ではなく、自然な選択肢になる環境」を築くことに貢献したいと思っています。

また、私は福井県出身者として、ふるさとへの恩返しも大切にしたいと考えています。幼い頃から地域の方々に温かく支えていただき、この奨学金にも背中を押していただいたからこそ、今の自分があります。将来は福井県でも演奏会や室内楽セミナーを開催し、子どもたちや音楽を志す学生が本格的な室内楽に触れられる機会を増やしたいと考えています。地方にいても世界につながる音楽を学べる環境をつくるのが、私なりの恩返しになると信じています。

最後に、これから夢へ向かう後輩の皆さんへ伝えたいことがあります。

目標へ向かう道のりでは、経済的な不安や、自分の力に自信が持てなくなる瞬間があるかもしれません。しかし、そのようなときこそ、一人で抱え込まず、支援してくださる方々や制度を信じ、挑戦する勇気を持ってほしいと思います。私自身、この奨学金があったからこそ海外留学という大きな一歩を踏み出すことができました。そして今は、その経験を将来社会へ還元したいという思いが、以前にも増して強くなっています。

支えていただいたことへの感謝を忘れず、その恩を音楽を通して社会へ返していくこと。それが奨学金を受けた者としての責任であり、私のこれからの使命であると考えています。

改めまして、このような貴重なご支援を賜りました公益財団法人大堀秀夫記念育英財団の皆様へ、心より御礼申し上げます。今後も一層努力を重ね、音楽を通して社会に貢献できる演奏家となれるよう精進してまいります。

私は名古屋大学大学院工学研究科、推進エネルギーシステム工学研究グループに所属しています。研究分野はデトネーションと呼ばれる超音速で燃焼が進行する現象を扱っています。デトネーションにより素早く燃えることで、ロケットエンジンやタービンエンジンの高効率化を目指しています。私はデトネーション燃焼をタービンエンジンに応用する研究を行っており、一年半の研究生活の中で様々な経験を積むことができました。

研究室のポリシーとして積極的に学会に参加することが勧められ、私自身もこれまでに国内学会に2回、国際学会に2回参加しました。いくつかは規模の小さい学会ではあるものの、それに向けての準備はとても大変でした。しかし、学会に参加すると自分と同じ研究分野の人から詳細なアドバイスがもらえるのに加え、自分とは分野が異なる人からもより客観的で広い視野を持ったアドバイスがいただけるため、自身の研究の立ち位置を知りうえて、とても有益な機会になりました。

国際学会では口頭発表とポスター発表を英語で行いました。口頭発表は用意した原稿を読めば何とかなるものの、ポスター発表は数時間、質問に対応し続けなければならないため大変でした。しかしながら、この経験を通して、自分の英語がどこまで伝わるのかがよくわかりました。そして、下手な英語でもジェスチャーや図を用いて、必死に伝えようとすれば、案外伝わることを実感することができ、英語を話すことに自信を持つことができました。

この一年間で、自身の研究分野に対する理解を深めるにとどまらず、学外、そして国外の人々と積極的に関わる機会を得ることで、伝える力、コミュニケーション能力を向上することができたと感じています。

私は大学時代の4年間、そして大学院時代の2年間、計6年間、奨学金を利用させていただきました。大学進学にあたっては一年浪人しており、妹もいることから、できる限り親に金銭的な負担をかけずに学業に励みたいと考えていました。両親は自営業を営んでおり、将来的な収入についても必ずしも安定しているとは限らなかったため、自分自身が学ぶための費用をできるだけ自分で賄いたいという思いがありました。そのような状況の中で、奨学金を利用することができたことは、私が大学、そして大学院へ進学し、自由に学ぶための大きな支えとなりました。

大学在学中はアパートから大学へ通い、奨学金は主に学費と家賃に充てていました。大学院までの6年間にわたり奨学金を利用したことで、経済的な面で親に大きな負担をかけることなく、自分の興味や関心を追求しながら自由に学業に取り組むことができました。特に私は学生時代、学業に力を入れていたため、生活を維持するための経済的な不安を必要以上に抱えることなく、建築について学び、考える時間を持てたことは非常に大きかったと感じています。

大学では建築について幅広く学び、大学院ではさら建築環境に関する研究に取り組みました。大学院で研究したのは、オフィスで長時間働く人々が、より健康に働くためにはどのような環境が必要なのかというテーマです。特に、室内の温熱環境や什器、さらには個人の生活習慣など、さまざまな要素が働く人のwell-beingや熱的快適性にどのような影響を与えるのかを研究しました。アンケート調査や実測調査を中心に研究を進め、調査対象者の状態をリアルタイムで把握できるよう、アンケートをリアルタイムで取得する仕組みの構築にも取り組みました。

この研究を通して強く感じたのは、建築や設備は、単に決められた性能を満たすものをつくれればよいのではなく、実際にその空間を利用する人がどのように感じ、どのように過ごすのかまで考えることが重要だということです。同じ温度や同じ空間であっても、そこにいる人の状態や生活習慣などによって感じ方は異なります。研究を通じて、人を中心に環境を考えることの難しさと面白さを学ぶことができました。

現在は、設備施工に関わる会社に入社しました。まだ研修中で、設備設計者、研究職、施工管理者など、今後どのような立場で仕事をするようになるのかを考えている段階です。学生時代には、完成した空調システムなどの建築設備が、実際に人々の健康や快適性にどのような影響を与えるのかという側面から研究していました。一方、現在は実際にどのような空調システムを選び、それをどのように実現していくのかという側面について学んでいます。学生時代の研究と現在学んでいることが一つにつながっているように感じられ、そのことをとても興味深く感じています。

今後、建築・設備分野に携わる中で、特に挑戦したいと考えているのが、省エネルギーと快適性を両立した環境をつくることです。近年は脱炭素社会の実現が強く求められる一方、夏場の気温は非常に高くなっており、冷房を使用しなければ健康や生活を維持することが難しい場面も増えています。エネルギー消費を抑えることだけを目標とするのではなく、そこで過ごす人が「快適である」と感じられる環境を、いかに少ないエネルギーで実現するか。その両立に挑戦していきたいと考えています。

大学から大学院までの6年間、奨学金を利用できたことは、私にとって単なる経済的な支援以

上の意味を持っていました。学費や家賃という学生生活を送る上で必要不可欠な費用を支えていただいたことで、親への負担を抑えながら、自分自身の意思で学びを深めることができました。一年浪人してから大学へ進学した私にとって、大学院まで進学し、研究に取り組むことができたのは、奨学金という制度による支えがあったからこそだと感じています。

学生時代に自由に学び、研究することができた経験は、これから社会人として仕事をしていく上でも大切な財産になると思います。これからは、奨学金によって与えていただいた学ぶ機会を、自分自身の成長だけで終わらせるのではなく、建築・設備の分野を通じて社会に還元していきたいと考えています。人々が健康で快適に過ごすことができ、同時に環境への負荷も抑えられる建築・設備を実現するために、これまで学んできたことを活かしながら、これからも学び続けていきたいと思っています。

6年間にわたり奨学金を貸与していただき、学生として学び、研究する機会を支えていただいたことに、心より感謝しています。今後はそのご支援によって得ることができた知識や経験を仕事に活かし、社会に貢献できる人材へと成長することで、いただいた支援に応えていきます。

2年生の夏

学部2年 R.B

この度は、奨学生返済免除生に選んでいただき、心より感謝申し上げます。

現在、大学では、有機化学や物理化学について学んでいます。これらは化学プロセスを効率よく行い、産業化を実現するために重要です。私は将来、化学反応プロセスの産業化を行いたいと思っています。そのためには、有機化学の勉強だけでなく物理の勉強も必要なため、しっかり学んでいきたいと考えています。また先日、研究室見学に行き、今後自分が進む進路を再確認することができました。特に興味を持った研究室は高分子化学研究室です。その研究室では、有機金属化学をベースとした新しい重合手法・高分子反応・高性能触媒の開発に取り組んでいます。新たな合成手法を開拓することで、高強度・高透明性・リサイクル性・オンデマンドな分解性といった、これまでに無い特徴的な機能を持つ次世代ポリマーの創出を目指しています。私はその研究室で、プラスチック・ゴム・繊維などの高分子材料の一次構造や分子量を研究し、精密に制御することで、新たな機能を発見したいと考えています。

また、今年の夏は、なぎなたでインターカレッジに出場しました。大学に入ってから初めての大会だったためすごく緊張しました。インターカレッジという大きな舞台に立ち、全国から集まった選手たちと同じ空間でなぎなたに向き合えたことは、とても貴重な経験でした。普段の稽古とは違う緊張感や会場の熱気に圧倒されつつも、自分の中にあるなぎなたへの想いや、これまでの積み重ねを改めて実感する時間となりました。また、他大学の選手の姿勢や動きから学ぶことも多く、自分に足りないものや、これからの課題がより明確になりました。応援してくれる仲間の存在にも支えられ、自分がなぎなたを続けてきた意味を再確認できた大会でした。これからも一つ一つの稽古を大切にしていきたいと思っています。

大学院で学んでいること、私の研究

修士2年 R.H

私は大学院にて、東京電力福島第一原子力発電所（1F）に存在する燃料デブリの取り出しを、安全かつ確実に実現するための研究に取り組んでいます。1Fは未解明な情報や厳しい環境条件が多く、困難の多い現場です。そのような状況を切り開くには、独創的で高品質な技術開発が不可欠であり、廃炉という「マイナスをゼロに戻す」取り組みにとどまらず、新しい価値を創出する可能性を秘めていると信じています。

私の具体的な研究は、燃料デブリに残存する核燃料から発生する核分裂中性子を計測し、その統計的なゆらぎを解析することで体系の安全性を評価するものです。デブリ周辺では従来の検出器では対応できない、小型・軽量かつ高性能な装置が求められます。まさに独創的なモノづくりが必要とされる領域であり、私は他大学や研究機関と協力しながら課題解決に挑んでいます。

これまでの成果は学術論文として発表しており、海外の研究者から関心を寄せていただく機会も得ました。さらに、国内外で研究発表を行う機会をいただき、直近ではアメリカで開催された国際会議にて研究室の先生と共にシリーズ発表を行いました。専攻内の研究中間発表では最優秀賞を受賞し、専門外の先生方に研究をわかりやすく伝える力も磨いています。

大学院での研究生生活は残り半年を切りましたが、今後はこれまでの成果をさらに深め、修正論文としてまとめ上げることを目標としています。また、自身が培った研究のノウハウを後輩へ引き継ぎ、次世代につなげていきたいと考えています。

学問と挑戦を支えてくれた奨学金に寄せて

学部 4 年 D.K

公益財団法人大堀秀夫記念育英財団の皆様からの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。奨学金は、私の大学生活を経済面で支えてくれただけでなく、学問と実践という二つの世界に没頭するための「時間」という貴重な贈りものでした。経済的な安心があったからこそ、研究や課外活動に全力で取り組むことができました。

大学では人的資源管理を専門に学び、現在は卒業論文に向けて「日本企業の中間管理職はなぜ疲弊してしまうのか」というテーマに取り組んでいます。プレイングマネージャー化や長時間労働が、満足度やなり手不足にどう影響するのかを、公的統計データを用いた分析で明らかにしようとしています。仮説を立てて検証を繰り返す作業には多くの時間を要しますが、奨学金のおかげでアルバイトに追われることなく研究に専念できました。支援がなければ、このような学びは到底実現できなかったと思います。

一方で、机上の学問にとどまらず実践の場にも挑戦しました。学生団体では就職活動をテーマにしたオンラインイベントの責任者を務め、160 名以上の学生と 4 社の企業様をつなぎました。多様な立場の人々をまとめる難しさに直面しましたが、試行錯誤を重ねた末に成功を収め、参加者から感謝の言葉をいただけたことは大きな自信となりました。経済的な支えによる精神的余裕がなければ、この挑戦に全力で向き合うこともできなかったと実感しています。

研究に注いだ時間と、実践で得た経験。この両輪は、将来「データという客観的事実」と「現場で働く人の想い」をつなぐことのできる人事の専門家になりたい、という私の目標へと確かに結びついています。

最後になりますが、福井県の高校生の皆さんへ。大学には数えきれないほどの挑戦の機会が待っています。恐れずに一歩を踏み出し、自分の可能性を広げてください。

学問と挑戦を支えてくれた奨学金に寄せて

学部 4 年 M.K

公益財団法人大堀秀夫記念育英財団の皆様からの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。奨学金は、私の大学生活を経済面で支えてくれただけでなく、学問と実践という二つの世界に没頭するための「時間」という貴重な贈りものでした。経済的な安心があったからこそ、研究や課外活動に全力で取り組むことができました。

大学では人的資源管理を専門に学び、現在は卒業論文に向けて「日本企業の中間管理職はなぜ疲弊してしまうのか」というテーマに取り組んでいます。プレイングマネージャー化や長時間労働が、満足度やなり手不足にどう影響するのかを、公的統計データを用いた分析で明らかにしようとしています。仮説を立てて検証を繰り返す作業には多くの時間を要しますが、奨学金のおかげでアルバイトに追われることなく研究に専念できました。支援がなければ、このような学びは到底実現できなかったと思います。

一方で、机上の学問にとどまらず実践の場にも挑戦しました。学生団体では就職活動をテーマにしたオンラインイベントの責任者を務め、百六十名以上の学生と四社の企業様をつなぎました。多様な立場の人々をまとめる難しさに直面しましたが、試行錯誤を重ねた末に成功を収め、参加者から感謝の言葉をいただけたことは大きな自信となりました。経済的な支えによる精神的余裕がなければ、この挑戦に全力で向き合うこともできなかったと実感しています。

研究に注いだ時間と、実践で得た経験。この両輪は、将来「データという客観的事実」と「現場で働く人の想い」をつなぐことのできる人事の専門家になりたい、という私の目標へと確かに結びついています。

最後になりますが、福井県の高校生の皆さんへ。大学には数えきれないほどの挑戦の機会が待っています。恐れずに一歩を踏み出し、自分の可能性を広げてください。

研究生生活を終えて

社会人 D.M

まず初めに、大堀秀夫記念育英財団の奨学生として採用していただき、2年間ご支援いただきましたことに心より感謝申し上げます。この2年間頂いた奨学金は私にとって大変大きな助けとなりました。特に経済的な不安が軽減されたことは、研究に対して集中して取り組む基礎になったと確信しております。大学院に入って学部のように比べて金銭面の負担増加は、私が学生生活を起こる上で最も懸念する事項でしたが、奨学金によって大学院での研究に使える時間が学部の頃から想定していたより大幅に増加し、経済的面の不安が解消されたことは大きな意味がありました。この2年間の研究生生活を通して得られた経験によって、私を技術者としてのスタートラインに立つことができました。

この2年間の研究は主に工作機械の知能化に関する研究に取り組んでいました。新しく取り組み始めた研究テーマは知識も技術も未熟な自分の力ではなかなかスムーズに進まずひどく苦勞しました。研究を進める実験の傍らに、研究のために必要な知識を技術を身に着けることが重要でした。この頃、大堀秀夫記念育英財団の奨学生に選ばれ、ぐっと研究に打ち込める環境になり、知識と技術を学ぶ時間を多く作ることができました。それにより、研究は徐々に進んでいき1年が過ぎる頃には研究の3つあるサブテーマの中の1つである加工の安定状態判別手法に関してが一段落し、研究成果の学会発表や知財権の獲得等にいたるまで仕上げることができました。1年目での成功は原動力となり、残りのサブテーマである加工状態のモニタリングについて仕上げるに至りました。この成果を大学院にいる間に論文化したかったのですが、そこまでは至らず現在執筆を行っております。私自身2年の間にここまで研究を推し進めることができるとは当時は思っていなかったですし、何より奨学生に選ばれたことがここまで研究を進めることができた要因でしょう。この2年は研究が産業界の発展のために少しでも貢献できたことを嬉しく思います。

この2年間の研究で培った知識・技術・経験は間違いなく私を成長させました。この成長も奨学金という大きな支えがなければなかったと改めて確信しております。奨学金は私の学業生活を支え、今後の技術者として歩む社会人生活を送る上で欠かせない自己を作り上げた大切な基盤でした。今後も頂いた支援を忘れず、社会に貢献できる人材として成長を続け産業界に貢献したいと考えております。

奨学金が支えた学び

学部4年 H.M

私は現在、国際学部で学び、英語やロシア語などの言語や、国際問題に関する難易度の高い授業に取り組んでいます。これまでの学業を通じて、常にトップの成績を維持することを最優先にしながら努力を重ねてきました。奨学金を受けるためには、一定以上の成績をキープし続ける必要があり、その目標に向かって全力を尽くしました。

その結果、2024年度には成績優秀者として表彰されることができ、特別な経験となりました。この成果を得るためには、日々の努力と計画的な学習が不可欠だったと感じています。奨学金は私の学校生活にとって、単なる金銭的支援にとどまらず、精神的な支えとなりました。学費の支払いに関する不安が軽減されることで、学業に集中できる環境が整い、成績維持のためにより多くの時間を勉強に充てることができたと思います。

奨学金は主に学費に充てました。他には、教科書や参考書の購入などにも使うことができ、とても効果的だったと感じています。学費の心配がなくなったことで、精神的な余裕が生まれ、学びへのモチベーションも高まりました。成績をキープするために、特に専門的な講義を大切にしました。ひとつひとつの授業で復習を欠かさず、成績に大きく影響する期末レポートやテストは計画的に準備をし、何度も見直しを行いながら勉強しました。学業と並行してアルバイトもしていますが、奨学金によって学費の負担が減ったことで、アルバイトに追われることなく学問に専念する時間を確保できました。結果として、学業に対する集中力が増し、成績の維持につながりました。

現在は卒業論文を書くため、卒業研究に励んでいます。これまでに得てきた知識を活かし、深い研究になるようさらに努力を重ねたいです。この奨学金を無駄にしないよう、最後までいい成績を維持し努力します。

研究活動について

修士 1 年 K.M

私は大学院工学研究科航空宇宙工学専攻博士前期課程 1 年で、推進エネルギーシステム工学研究グループの笠原研究室に所属しています。この研究グループが専門とする分野はデトネーション（爆轟）と呼ばれる現象です。デトネーションとは可燃ガス中を、衝撃波を伴いながら燃焼伝播する燃焼波のことであり、一般的に日常にみられる燃焼とは異なり、超音速で燃焼が進行し爆発的な燃焼反応を起こすため、一瞬で高い圧力と温度を発生させることができます。この現象を熱機関として応用するものの一つに回転デトネーション燃焼器（RDC）があります。この RDC を用いて本研究室では基礎研究から応用研究まで幅広い研究を行っています。

私はこの RDC を航空機などに利用されるタービンエンジンの燃焼室として用いる回転デトネーションタービンエンジン（RDCE）に関する基礎研究を行っています。この RDCE の自立作動はまだ達成されておらず、様々な研究課題、技術課題があります。その中でも私は燃焼室で燃焼したガスの流れが現在のタービンエンジンと比べて、RDCE としたときにどのような差があるかに注目しています。特にタービンエンジンではその流れからタービンを用いて回転力を得る必要があるため、タービンの効率を高めるには燃焼したガスの流れの特性を詳しく知る必要があります。そこで、タービンエンジンに RDC を用いる優位性を明らかにするために普通の燃焼とデトネーション燃焼によって発生した流れの中にタービンブレードを模擬した翼を設置し、その翼の空力特性を測定することで、2つの燃焼の特性の差とそれが翼に与える影響を調べる実験を行っています。まだこの研究活動が始まって半年ですが、精一杯頑張っていきたいと思います。

現在の状況

教員 Y.R

私は、大学で「小学校教育」と「特別支援教育」について学び、小学校教育諭の免許状と特別支援学校教育諭の免許状を取得した。現在は、特別支援学校で教員として勤務している。今年の4月1日に配属され、次の週には入学式、自分が担任になり『本当に大丈夫かな』と不安でいっぱいなところからはじまった。勤務してはやくも半年がたち、今では、不安よりも楽しさや子どもたちの成長を感じられることで教員としてのやりがいの方が大きく感じている。

特別支援学校は、子どもたち一人ひとりに合わせた教材づくりや環境づくりが大切であり、各クラス6～8名の児童生徒に対し担任2～3名で支援をしているため教員間での連携も大切である。実際に教員として働き、大学で学んだ個々の実態把握のもと、その子に合わせた教材の作成や環境設定をすることの大切さをとても実感している。また、教員間で連携し支援等に対する共通認識をはかった上で、指導・支援を行うことの重要さも実感している。

このように、今教員として働くことができているのは、学生の頃、自分が学びたいことに熱中できたからである。それは、奨学金を借りることができ、学びへの時間を確保しながら学生生活を送ることができたからだ。一人暮らしをしている場合、家賃や光熱費等の生活費をアルバイトのみで稼ぐことは難しく、アルバイトをすればするほど学びの時間は多くは確保できなかったと思う。奨学金を借りたことで、学生時代の貴重な時間を学びの時間にあてることができた。その学びの時間が確保できたからこそ、今教員として働くことができている。

教員になって毎日元気に登校する子どもたちに会えるのがとても楽しみで、子どもの成長を日々感じながら仕事ができている。これからも子どもたちが楽しく学べる環境づくりや教材づくりを行い、教員として学び続けていきたい。

加工と制御工学

大学院 D.M

このたび、公益財団法人大堀秀夫記念育英財団の奨学金を受給する機会をいただき、誠にありがとうございます。

私は大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻に所属し、航空宇宙に関連する加工や制御技術に関して研究に取り組んでおります。頂いた奨学金のおかげで、生活費や学費に悩むことなく、学業に専念できる環境が整い、充実した研究生生活を送ることができており、非常に感謝しております。本稿では、私が大学院で取り組んできた加工と制御の研究に関して簡単に紹介して、工学の魅力を少しでも感じて頂けると幸いです。

世の中の乗り物や、ロボット等は主に2つの要素から構成されると思います。それは、機体の構造と、それを操作する技術です。工学ではこの2つの系統に関して幅広く扱う分野です。私はその中でも機体の構造においては、設計した構造を実際を実現するための加工学と、操作する技術を理論的に設計する制御工学に関して研究を行っています。

加工学はものをいかに効率よく、精度よく材料を加工するか考える現代社会を支える土台の学問です。我々が普段利用する、スマートフォンや車などはまさに加工技術のたまものです。私はそんな加工技術において、加工中の状態をモニタリングする研究を行っています。加工中の情報から、よりよい効率と精度を達成できる加工条件をフィードバックするものです。

制御工学は制御対象をいかに最適な動作をさせるか考える学問になります。飛行機が墜落せず飛行し、エアコンが心地よい温度に調整してくれるのが制御技術です。私は制御工学において、対象を物理的により厳密に扱う非線形制御に関して、偏微分方程式と機械学習を組み合わせた研究を行っています。

工学は今話題のAIとか情報工学から離れた古い分野というイメージがありますが、実際にはその技術を活用して現実に落とし込む研究が盛んに行われています。

二年半の大学生活を通して

学部3年 K.M

私は、航空宇宙工学科に所属し、日々勉強に励むとともに所属しているサークルでは今年度の代表として、活動を指揮しています。特に学部三年生に上がってからは私自身、成長を感じられた半年間でした。そのことについて後輩に共有し、なにか参考になればと思います。

学業では、3年次から選択の授業が一週間のほとんどを占め、実験も始まりました。私は様々な分野の知見を広げたいという思いから、取れる授業はすべて取りました。結果的には単位を落とすことなく終えることができましたが、課題やレポートの量、期末テストが大変多くなり、すべての授業に時間を費やすことができませんでした。また、サークルでは宇宙開発チームの代表を務めるとともにハイブリットロケットの開発・打上のため主要メンバーとして活動していました。打上は今年の8月に行い、無事成功を収めることができました。

結果的には、授業もサークルも何とか両立することができ私自身、物事に対する優先順位の付け方やタイムマネジメント能力を身に着けることができたとは感じています。しかし、自分の心身を追い込みすぎたという自覚はあり、もう少し自分の状態を客観視し、オーバータスクになる状態を避けることができたならよかったと感じています。

この経験から、大学生活において学業、サークル、バイトなど様々なことをやる機会が増えると思いますが、常に自分が今優先すべき事項は何かを考え、自分が対処できる容量を超えないように、やりたいことを選択して行ってほしいと後輩に伝えたいです。現に自分を制御できなくなり、精神を病んでしまった友達も見てきました。ぜひ、このようなことには気を付けて、大学生活を楽しんでもらえたらと思います。

卒業論文およびその展望

修士1年 M.K

昨年、私は所属した研究室で先輩方に助けをいただきながら、研究を進めた。そして、研究の成果として卒業論文を執筆した。内容は、知的生産性やウェルビーイングの向上を目的とした実測における、最適な手法の開発であった。

特に、ウェルビーイングの向上について論じる際は長期的な視点が必要なため、長期間継続して計測することが可能な簡易な手法が求められる。スマートウォッチを使用することで、簡易な測定を目指した。

スマートウォッチでは、心拍数や睡眠データなどの整理料の取得と同時に、アプリを使用してアンケート申告も可能である。これらを組み合わせることで、ウェルビーイング等について分析を行なった。

卒業論文では、手法の開発と開発した手法を用いた実測をまとめるにとどまった。そして、今年度はいくつかの学会で卒業論文の内容を発表した。学会では、手法の説明や得られたデータを用いた分析結果について発表を行った。質疑の時間では、より良い手法や分析の新たな視点について意見をいただいた。これらを踏まえて、今後さらに研究を進めていく予定である。

具体的な研究の展望として、ウェルビーイング等の向上の観点からおすすめの環境や行動を提案する仕組みの構築することを考えている。具体的には、アプリを介した通知によって複数の提案を行う。この通知は、生理量の取得やアンケート申告と同じくスマートウォッチを使用する予定である。

複数の提案の中で、行動に移したいものはあったのか、どれが効果的だったかなどを聞き、フィードバックしていきたい。始めは当たり障りのない提案かもしれないが、回を重ねるごとにフィードバックの内容を活かし、自分に合ったおすすめが表示されるという仕組みを目指す。最後に、貴財団の御助力があるからこそそのびのびと研究できており、大変有り難く思う。

国際会議に参加して

修士1年 R.H

私は現在、大学院工学研究科に在籍しており、東京電力福島第一原子力発電所の燃料デブリ取り出しに関する研究を行っています。研究成果を国際会議で発表する機会がありましたので、本寄稿文ではその体験についてご紹介いたします。

私は、アメリカ・サンフランシスコで開催された国際会議「International Conference on Physics of Reactors (PHYSOR2024)」に参加しました。この会議は原子炉物理に関する国際学会で、世界中から研究者が集まり、それぞれの成果を発表し、活発なディスカッションが行われます。口頭発表は3日間にわたり、200件以上の発表が行われました。私は1日目のセッションで発表を行い、内容は1F燃料デブリ取り出し前の不確かさ評価手法についてです。初めての国際会議ということで緊張しましたが、事前の発表練習の成果を出し、自信を持って自分の研究を伝えることができました。発表後の質疑応答ではリスニングが難しく、何度か質問を聞き返す場面もありましたが、自分の言葉で回答することができました。いくつかの質問をいただき、聴衆の方々が興味を持っていただいたと感じております。また、同じセッション内には私と似た発表があり、世界の研究者とのつながりを感じ、感動を覚えました。

国際会議の最終日にはレセプションが開催され、現地の学生や研究者とディナーを囲んで交流する機会がありました。フレンドリーな方々が多く、充実した時間を過ごすことができました。

初めての国際学会に参加する中で、研究室の先生方や先輩方から多くのサポートをいただきました。また、金銭的な心配なく参加できたのは、貴財団からのご支援あつてのものであり、心より感謝しております。今後も自身の研究に励み、来年度4月にアメリカで開催される国際会議に向けて、さらなる成果を上げることを目指します。

将来への抱負

会社員 R. S

この度は奨学金返済免除学生に選んでいただき、心より感謝申し上げます。この支援は私にとって大変励みになり、今後の学びや成長に向けて一層の努力をする原動力となっています。

大学生活を通じて、東京という大都市で暮らす中で改めて福井の良さを実感しました。福井県における新幹線開業に合わせて、福井の魅力を広めるイベントを企画・運営する機会をいただきました。このイベントでは、東京と福井をつなぎ、福井のまちづくりについての議論を深めるとともに、東京から来てくださった方々と福井の学生や社会人との交流の場を設けました。この経験は、福井の魅力を多くの方々に伝える大変貴重な機会となり、私自身も深い学びを得ることができました。

将来的には福井にUターンし、地元貢献したいと考えています。特に、ITの分野で福井の発展や地方創生に寄与することが私の目標です。高校時代からの目標であるSociety 5.0の実現に向けて、現在東京で最先端の技術を習得し、将来的に福井に還元したいと思っています。IT技術が地域の発展にどのように寄与できるかを常に考え、福井の地元企業や自治体と連携したり、新たなビジネスモデルやサービスを提供したりすることで、地域の活性化に貢献したいと考えています。そのために、今後も学び続け、最先端の技術や知識を身につけてまいります。

改めて、このような機会を与えてくださった貴財団に深く感謝申し上げます。今後も社会に貢献できるように精一杯努力していく所存です。支援いただきまして、誠にありがとうございました。

博士課程と奨学金との関わり

会社員 H.S

この度は、奨学金返済免除生に選んでいただき、心から感謝申し上げます。

大学での学びは一般的に4年間と思われがちですが、その後には大学院というさらなる学びの道が続きます。2年間の修士課程、そして3年間の博士課程を経て、合計9年間にわたります。大学院では、より高度で専門的な知識を深め、自立した研究者としての能力を培うことが可能です。私もその9年間を経て、ようやく研究者としてのスタートラインに立つことができました。

特に博士課程の3年間、奨学金のご支援をいただいたことは、私にとって大変大きな助けとなりました。博士課程において、奨学金がもたらしたメリットは二つあります。第一に、経済的な不安が軽減され、研究に集中できたことです。博士課程に進むと、同級生の多くは既に就職しており、彼らの社会での活躍を目の当たりにすると焦りを感じることもあるでしょう。しかし、奨学金のおかげで、そうした不安を最小限に抑え、研究に専念することができました。第二に、奨学金のおかげで経済的に自立した生活を送り、金銭感覚や経済管理能力を身につけることができた点です。経済的に自立することで、自分の研究や生活を主体的にコントロールする力が養われました。

これまでの9年間の学びと研究生活は、奨学金という大きな支えがなければ成し得なかったものです。博士課程で得た知識や経験は、これからの社会人生活において大きく役立つと確信しています。現在、私は計算科学やデータ科学を活用し、材料開発に関わる研究職に従事しています。この分野では、新素材の発見や特性予測に向けた研究が非常に重要であり、私もその一端を担えることに大きな誇りを感じています。

奨学金は、私にとって学業生活を支えるだけでなく、今後のキャリアにおいても欠かせない大切な基盤となりました。今後も、いただいたご支援に恥じぬよう、社会に貢献できる人材として成長していきたいと考えています。

大学生活の現在の状況

学部3年 S.Y

現在、私は大学で体育会陸上競技部に所属しています。そこでマネージャーをしており、選手ファーストを第一に選手がより良い環境で練習に取り組めるよう、日々サポートしています。160名の部員を8名のマネージャーで支えており、その中でも私はマネージャー長を務めています。私は現在3年生ですが、選手に対するサポートの姿勢と陸上に対する熱意が伝わり、1年早くパート長を任されることになりました。1つ下の学年ということもあり、他の幹部とのコミュニケーションのとり方に少し苦労した時期もありましたが、コミュニケーションを重ねていく中で、年上の人との関わり方や自分の立場を考えながら発言することの大切さを学びました。

また、自分自身も高校生まで10年間全国大会入賞というという目標に向かって、陸上競技に全力を注いできました。高校から実家を離れて強豪校へ進学し、頼る人が居ない環境での生活や厳しい練習の日々を過ごしてきました。怪我で思うよう練習が出来ずに、苦しんだこともありました。この経験があるからこそ、選手の気持ちを理解することができると思っています。誰よりも選手の気持ちに寄り添えるマネージャーでありたいという思いで、選手に対して言葉がけや行動を行っているおかげもあり、選手たちから頼られることも多く、深い関係を築くことが出来たと思います。感謝される喜びや、誰かのために頑張れる自分がいることに気づくことが出来て、本当にマネージャーとして体育会陸上競技部に入って良かったなと感じています。また、パートをまとめる役割を任せて貰えたことで、周りを見る力や、臨機応変な考え方やそれを行動する力が身につき、人として大きく成長することが出来ました。この経験をこれからの人生にも活かしていきたいです。

教育の外部性と奨学金

学部4年 Y.H

この度は大堀秀夫記念育英財団の返済免除生として採用していただき、心より感謝申し上げます。2年前に返済免除生に採用していただいた際は、自身が大学で学んでいることや将来の目標について書かせていただきました。今回はこの寄稿文を通し、奨学金を借りている生徒として理解しておくべき教育の外部性と奨学金のかかわりについて、後輩に伝えたいこととして記させていただきたいと思います。

教育の外部性、特に正の外部性とは主に経済学において使われる言葉で、教育は個人における知識や技能向上（個人の利益）にとどまらず、最終的には社会全体にも恩恵をもたらすという考え方です。奨学金という制度は、まさにこの教育の正の外部性を最大化するための支援であり、奨学金を通じて支援を受けることの意味や責任を深く理解することは、受給者の意識を高め、学業や社会貢献に対するモチベーションを向上させる要素にもなると考えています。

私自身も大学4年間奨学金で支援を受けさせていただいておりましたが、貴財団の目的や理念を理解することで、支援は一方的な恩恵ではなく、私が得た知識や技能を社会に還元するという形で応えるべきものであることを常に頭において生活することができました。貴財団の目的は福井県において、学生に対する奨学金の給付及び貸与、並びに子ども及び保護者或いは教育関係者を対象とする社会教育事業を行い、社会に有用な人材の育成に寄与する

（ホームページより抜粋）ことです。後輩の皆さんにも、自分が受けている教育や奨学金の意義をしっかりと考え、支援を無駄にすることなく、自分の学びを将来の社会にどう貢献できるかを常に意識しながら行動してほしいと願っています。